南極地域観測統合推進本部
輸送計画委員会（第１０２回）議事次第

日　　時：令和８年１０月８日（木）１４：００～１６：００

場　　所：文部科学省研究開発局１会議室及びオンライン（ハイブリッド開催）

議　　題：

≪報告事項≫

１．南極観測実施責任者評議会（COMNAP）の状況について

２．第 67 次観測隊越冬隊の現況等について

３．リュツォ・ホルム湾の海氷状況について

４．令和８年度砕氷艦「しらせ」年次検査・航空機（CH-101）定期修理について

５．令和９年度南極地域観測事業概算要求の概要について

≪審議事項≫

６．第 68 次南極地域観測隊行動実施計画（案）について

７．次期輸送体制について（案）

配付資料：

≪報告≫

１．　南極観測実施責任者評議会（COMNAP）の状況

２－１．第 67 次南極地域観測隊越冬隊の現況（令和 8 年 5 月～8 月）

２－２．昭和基地における漏油について

３．　リュツォ・ホルム湾の海氷状況について

４．　令和８年度砕氷艦「しらせ」年次検査・航空機（CH-101）定期修理

５．　令和９年度南極地域観測事業概算要求の概要

≪審議≫

６－１．第 68 次南極地域観測隊行動実施計画（案）の概要

６－２．第 68 次南極地域観測隊行動実施計画（案）

７．　今後の南極地域観測事業の検討に当たっての主な論点について（案）

≪資料配布のみ≫

８．　最近の主な成果

≪参考資料≫

１．南極地域観測統合推進本部運営規則及び南極地域観測統合推進本部委員会運営規則

２．南極地域観測統合推進本部輸送計画委員会構成員名簿

第 38 回南極観測実施責任者評議会（COMNAP）年次総会報告

COMNAP 年次総会（AGM）が、2026 年 8 月 4 日から 6 日にかけて、ノルウェーのトロムソで開催された。34 か国加盟機関のうち 30 の代表者に加え、2 つのオブザーバー国の代表者、および 4 つの関係団体（南極条約事務局、環境保護委員会（CEP）、南極研究科学委員会（SCAR）、国際南極観光業協会（IAATO））の代表者が参加した。また、年次総会に加え 8 月 6 日と 7 日には第 6 回 COMNAP 捜索救助（SAR）ワークショップが開催され、ゲートウェー都市・国の救助調整に関わる政府組織、医療等の専門家、ならびに南極海洋生物資源保存委員会（CCAMLR）事務局が参加した。日本からは、国立極地研究所の野木所長と橋田南極観測センター副センター長、そして、COMNAP/SCAR 合同医療・医学専門家グループ（JEGHBM）議長の大野医師（雄武町国保病院）の計 3 名が参加した。概要は次のとおりである。

【地域別分科会】
南極半島、ロス海、東南極、ラルスマン・ヒルズ、ドロンイング・モード・ランド、および内陸地域の 6 つの地域別のセッションでは、各国の 2026/2027 年南極シーズンに向けた活動計画、基地近代化プロジェクト、環境変化に関連したリスクの軽減策などについて情報交換が行われた。また、南極半島地域の野生生物における高病原性鳥インフルエンザ（HPAI）の発生状況、および、オーストラリアとニュージーランドの国内で HPAI ウイルスによる野生生物の死亡事例が初めて確認されたことを受け、COMNAP として 2026/27 年南極シーズンに向けにアップデートした「COMNAP HPAI ガイダンス」を共有した。

【専門家グループ会合】
テーマ別の専門家グループ会合として、「安全」と「医学医療」専門家グループの合同セッションでは、フランス隊における潜水活動時の事故に焦点が当てられた。「航空オペレーション」と「海洋プラットフォーム」専門家グループによる合同セッションでは、船舶からのヘリコプター運用について検討が行われ、アザラシの群生地付近での航空機運用に関する助言を CEP に提供するよう、CEP から COMNAP に対して寄せられた要請についての議論が行われた。さらに、代替燃料、生物付着管理、新砕氷船の能力、および大型遠隔操縦航空機システム（RPAS）の活用についても充実した議論が行われた。そのほか、「重要技術の推進」、「教育・アウトリーチ」、「環境保護」、「科学促進」の各専門家グループ、ならびに「医学医療」合同専門家グループ（JEGHBM）」も開催された。「教育・アウトリーチ」専門家グループでは、各国の南極プログラムが社会に対して教育やアウトリーチを支援・提供についての多様な取り組みを紹介するポスターセッションが行われ、JEGHBM では派遣前の心理スクリーニングに関する話題提供があった。

【全体会合】
2027 年の基本年会費をインフレ率分のみ引き上げることにとどめることを決議するとともに、事務局の財政的持続可能性について引き続き議論する意向を確認した。また、2026 年から 2033 年までの戦略計画を了承した。同計画では、第 5 回国際極年 （IPY5）に参加する COMNAP 加盟機関を支援するためのロードマップを提示しており、2026 年 8 月 9 日にノルウェーのオスロで開催された COMNAP・SCAR 合同執行委員会会議においても提示された。
COMNAP 議長であるアグニエシュカ・クルシェフスカ（ポーランド代表）は、議長就任初年次として年次総会の議事を進行した。ウェンディ・ルビオ（チリ副代表）は、副議長としての 3 年間の任期を満了し、ハイニー・トラッド・ソウザ（ブラジル副代表）が 3 年間の任期で新たに副議長に選出された。オリバー・ダーク氏（英国代表）、ジャンルーカ・ビアンキ・ファサニ氏（イタリア代表）、オズグン・オクタル氏（トルコ代表）、シャイレンドラ・サイニ氏（インド）は副議長としての任期を継続する。ミシェル・ローガン＝フィネモアは、引き続き事務局長を務める。
第 39 回年次総会は、フランス極地研究所ポール＝エミール・ヴィクトール（IPEV）の主催により、フランス・ブレストにて 2027 年 7 月 5 日から 8 日まで開催される。

第67次南極地域観測隊越冬隊の現況（2026年5〜8月）

1. 気象・海氷状況

5月：月の初旬は晴れて冷え込む日が続き、6日には今年初めて-20℃を下回ったが、中旬以降は曇りや雪の日が多く、ブリザードがC級2回、B級1回、A級1回の計4回襲来したことで気温の推移は高目に転じ、月平均気温-9.5℃という観測史上最も温かい5月となった。先月から西の浦と北の浦およびオングル海峡の向岩以北では結氷が始まっていたが、23-25日のA級ブリザードによって再び岩島の北東まで開放水面になった。オングル島の南側と西側も依然として開放水面のままであり、不安定な海氷状況が続いている。4回のブリザードによりオングル島内の積雪は多少増えたが、月最深積雪は20 cmと前月に続き観測史上最小で、オングル島北側の海岸線にはほとんど雪が付かなかった。

6月：月の初旬と後半は晴れて冷え込む日が多く、19日には今年初めて-30℃を下回った。オングル海峡は見晴らしから向岩にかけては再び結氷しはじめた。向岩より南のオングル海峡およびオングル島の南側や西側では結氷と風による流出が繰り返されており、リュツォホルム湾内は不安定な海氷状況が続いている。

7月：月の前半は晴れて冷え込む日が多く、15、16日の日最低気温は-30℃を下回った。後半は荒天が続き、計4回のB級ブリザードに見舞われた。西の浦や北の浦の海氷は安定しており、とっつき岬ルートの氷厚は平均80 cmを超えるまでに成長した。オングル海峡も向岩の南側、ラングホブデ沿岸まで海氷が維持されるようになった。一方、オングル島の南側や西側では結氷と風による流出が繰り返されており、リュツォホルム湾内は不安定な海氷状況は続いている。

8月：全般的に風の弱い穏やかな曇りの日が多かったが、周期的に風が強まり荒れた天気となる日もあった。西の浦や北の浦の海氷は安定しており、とっつきルートの氷厚は、ルート開通時に比較的薄かったポイントでも90cm以上になり、一部100cmを超えたポイントもあった。オングル海峡は、5月末に開放水面になった向岩付近でも平均氷厚は80cmを超えた。リュツォホルム湾内は先月同様不安定な海氷状況は続いている。

2. 基地活動

5月：雪上車講習を21日に全隊員を対象に行った。25日に観測部会、27日に設営部会、28日にオペレーション会議、29日に全体会議を開き、観測、設営等の当月の報告と翌月の計画を共有した。26日に行った消防訓練では、管理棟火災を想定して、本部が基本観測棟に移動した場合の人員確認方法や燃料・電力・ガス遮断の役割分担、消火ポンプの起動手順などを確認した。

6月：安全対策として、2日にレスキューコアメンバーを対象としたレスキュー訓練を行った後、隊員全員を対象として消防とレスキュー双方で必要になる傷病者の搬送に重点を置いた島内レスキュー訓練を15日に、事故事例研究を30日に実施した。南半球の冬至を迎えるにあたり、ミッドウィンターフェスティバルを20日から23日にかけて開催し、極夜越しを祝賀した。26日午前に観測部会、午後に設営部会、29日にオペレーション会議、30日に全体会議を開き、観測、設営等の当月の報告と翌月の計画を共有した。

7月：基地内では見晴らしの橇引き出しやドーム旅行用のモジュールの移動、燃料ドラム缶の2t橇への積み込みなど極夜明け野外行動の準備を進めた。安全対策として、10日にレスキュー訓練、28日午前に消防訓練、31日に事故事例研究を実施した。28日午後に観測部会、29日に設営部会、30日にオペレーション会議、31日に全体会議を開き、観測、設営等の当月の報告と翌月の計画を共有した。

8 月：日が長くなる中、天候にも恵まれ、野外活動が活発化した。ルート工作では、先月開通したとっつき岬ルートを初島の北西で分岐させて向岩に向かう M ルートと、見晴らしから出て M ルートに合流する MM ルートを開通させた。大陸上ではとっつき岬～S16、向岩～S16、S16～S19 のルートを整備した。初めての宿泊を伴う野外行動として S16 オペレーションを 2 泊 3 日で実施し、18 日からは 4 泊 5 日で S16 オペレーションを行った。とっつき岬や向岩への燃料および物資デポのための日帰りオペレーションも 2 回実施しながら、S16 への燃料・物資輸送と大型車両を含む物資の持ち帰りを行った。

3. 観測

5 月：基本観測、研究観測を順調に実施した。地圏モニタリングの VLBI 観測は 19-20 日に、PANSY による電離圏特別観測は 18-20 日に実施した。

6 月：基本観測、研究観測を順調に実施した。PANSY による電離圏特別観測は 15-17 日に実施した。

7 月：基本観測、研究観測を順調に実施した。PANSY による電離圏観測を 13-15 日に、VLBI 観測を 21-22 日に実施した。

8 月：基本観測、研究観測を順調に実施した。PANSY による電離圏特別観測を 10-12 日に、VLBI 観測を 20-21 日に実施した。

4. 設営

5 月：設営部門では、PANSY 発電機の整備、基地発電機の電源切替、燃料移送、太陽光電池パネル点検を行った。月初めの冷え込みを受けて、6 日に排ガスボイラーの運用を開始した。不具合対応として、管理棟厨房の排気ダクトからの水油漏れ対応と基本観測棟 4G アンテナケーブルの修理を行った。

6 月：設営部門では、4 日に基地発電機の電源切替、12 日に PANSY 発電機の整備、17 日に燃料移送といった定期保守作業を実施した。

7 月：設営部門では、9 日に PANSY 発電機の整備、16 日に基地発電機の電源切替、22 日に燃料移送といった定期保守作業を実施した。19 日から始まったブリザード中に汚水第 2 中継槽の水位が上限に達して発報したため、基地内での水の使用を停止して問題解消に当たった。第 2 中継槽から汚水処理棟への配管の一部に凍結が確認され、これを解凍してヒーターを追加設置すると共に、配管ヒーターの設定温度を上げる対応を施し、21 日に復旧、水の使用を再開した。

8 月：設営部門では、13-14 日に PANSY 発電機を整備した後 21 日に切り替えを実施、基地発電機の電源切替は 7 日と 27 日に実施した。

5. その他

ミッドウィンターフェスティバルは、準備から本番、片付けまで全員が参加して発想や創意工夫、協力体制の醸成ができ、グリーティングカードの交換などにより南極の各国基地と交流なども行った。

8 月 20 日に行った燃料移送は、機械隊員 6 人中 3 人が野外行動で不在中に、他部門から 3 人の支援者を募って実施した。通常通りの手順で行ったが、貯油タンクの貯油量メーターを過信したことで、結果的に容量を超えた送油をしてしまい、圧抜き口から漏油する事故が発生した。燃料移送を中止して、迅速に漏油(40L 程度)と汚染された雪と土および油吸着材による残油回収(計ドラム缶 3 本)を行った後、機械隊員を中心に改めて作業手順を確認し、再発を防止するために燃料移送記録に注意事項を明記して燃料移送計画時および実施時に注意喚起されるようにした。

資料2-2
南極地域観測統合推進本部
第102回輸送計画委員会（R8.10.8）

昭和基地における漏油について

極地研
National Institute of Polar Research

昭和基地における漏油について

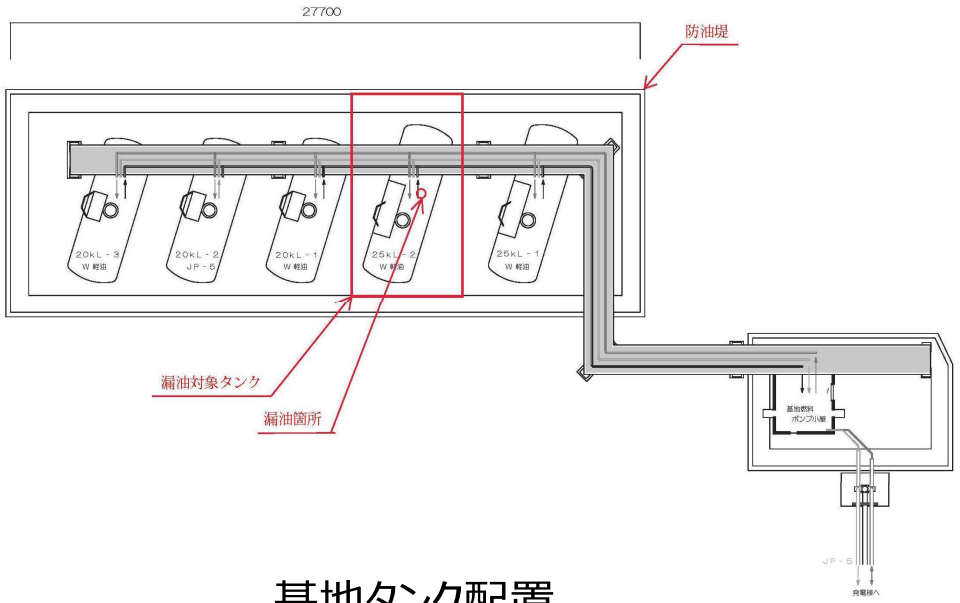
2026（令和8）年8月20日（木）12時35分頃（日本時間18時35分頃）、見晴らし岩100kLタンクから基地タンクへW軽油を移送中に、基地タンクから漏油した。漏油は防油堤内に止まり、堤外への拡散は確認されていない。

経緯

見晴らし岩100kLタンクから基地タンク(25kL)へ、見晴らし岩タンク小屋の流量計で2kL移送するごとに基地タンクの貯油量メーターを確認しながらW軽油を移送していた。12時23分に、貯油量メーターで貯油量が23.3kLとなったため、12時35分に燃料移送中の誤差を考慮し、流量計上の送油量が25.3kL相当となった時点でポンプを停止した。その後タンク切替時の確認をしたところ、圧抜き口から漏油しており、基地タンクの貯油量は満タンになっていた。



見晴らし岩100kLタンクと基地タンクの位置関係及び漏油発生時の体制



基地タンク配置

昭和基地における漏油について

対処

周辺の雪面及び地表面に漏れた油は、油吸着材等を用いて空ドラム缶３本に回収。また、満タンになった基地タンクに空き容量を作るため、発電棟内の予熱槽への送油を実施した。

原因

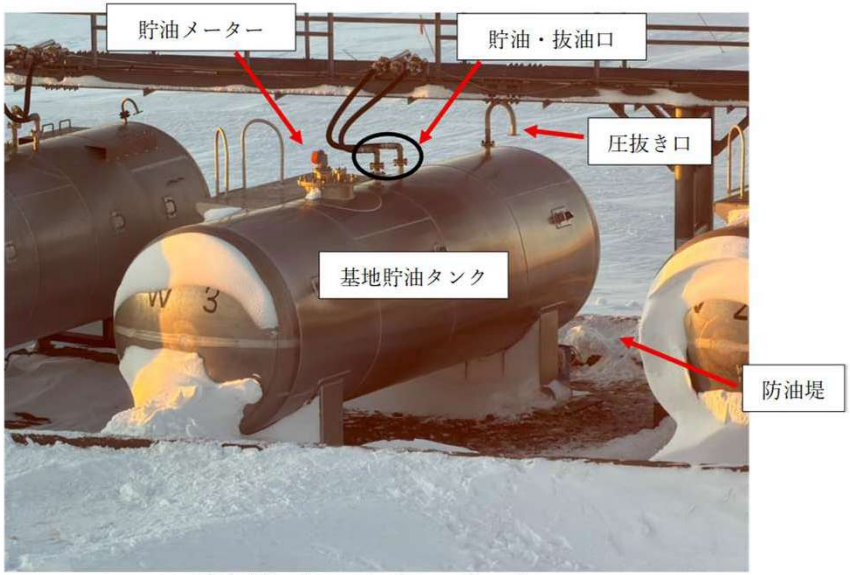
基地タンク（25kL）の最大貯油量は25.62kLとなっており、前回の移送時にも25.3kLまで貯油できていたため、今回も送油量に多少誤差があっても溢れることはないと考え、貯油量が前回と同様の25.3kLになるまで送油したが、貯油量メーター表示と実際の貯油量との誤差が想定より大きくオーバーフローした。

再発防止に向けて

①燃料移送の手順（チェックシート）に下記を明記する。

「送油後貯油量は*25kL*タンクで*24kL*以内、*20kL*タンクで*19kL*以内とする。（貯油量メーターが*25kL*タンクで*25kL*、*20kL*タンクで*20kL*の時に満タンとなり圧抜き口から溢れる。）」

②基地タンクの貯油量が25kLタンクで20kL、20kLタンクで15kLに達した時点で、速やかにタンクの切替操作が行えるよう、見晴らし側及び基地側ポンプ小屋に作業員を待機させる。



基地タンク(25kL)



基地タンク(25kL)の漏油箇所

資料3
南極地域観測統合推進本部
第102回輸送計画委員会（R8.10.8）

リュツォ・ホルム湾の海氷状況について

2026年9月　国立極地研究所 南極観測センター

第67次越冬隊および国立極地研究所は、越冬期間中や第68次隊夏期の行動の参考とするため、衛星画像や昭和基地における目視・気象・潮汐観測、無人航空機による空撮情報をもとに、基地周辺や「しらせ」航路・接岸地点周辺の海氷状況を監視している。

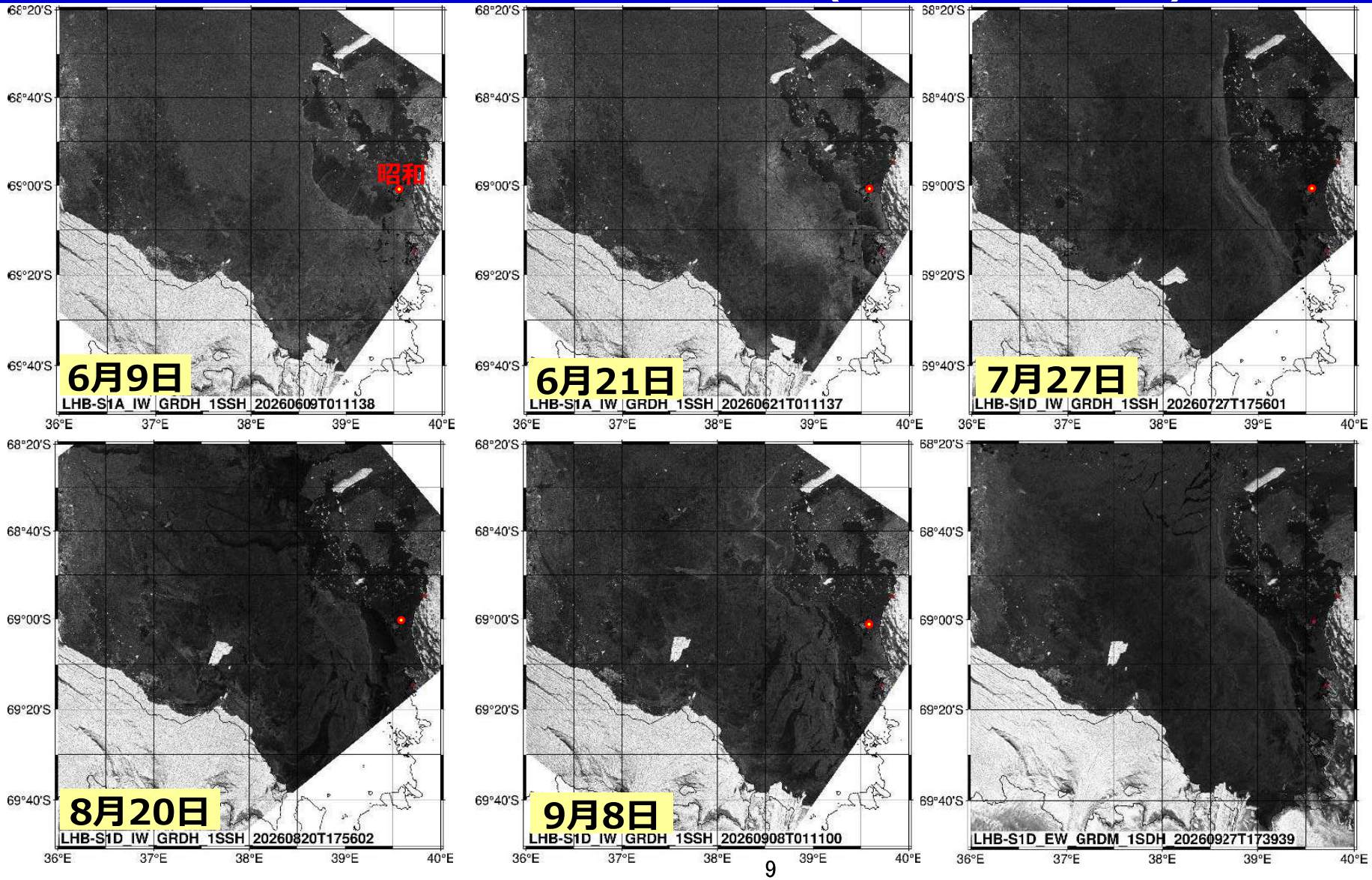
今年2026年9月下旬までの氷状

- リュツォ・ホルム湾内では1月以降、奥部まで割れ、流出が進行した。9月下旬時点で全域にわたっては安定的に凍結していない模様で、流出域は西オングル島西岸に達している（9/23時点）。
- オングル海峡では昨年形成された乱氷帯が1月初旬に流出した。海峡の北方は4月中旬以降、南方は7月下旬以降に凍結した。見晴らし岩沖を含めて北の浦では、残った多年氷と新たに形成した一年氷との間で段差が生じている。

今後、「しらせ」接岸地点候補エリアや氷上輸送ルートの設定のため、67次越冬隊が氷状調査を行う。

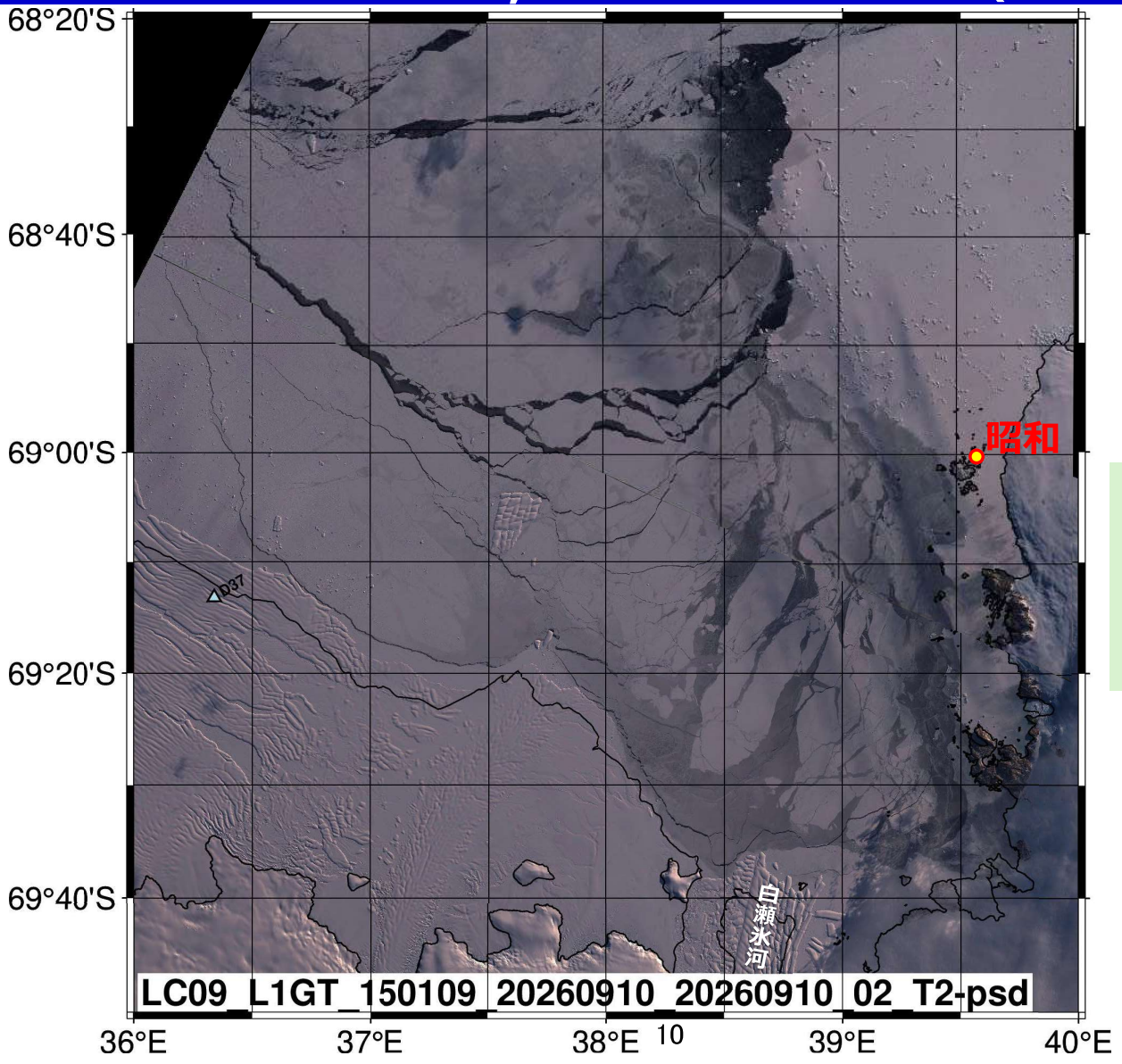
2026年 6-9月のリュツォ・ホルム湾内 (合成開口レーダー画像)

(Contains modified Copernicus Sentinel data 2026)



2026年 9月10日，リュツオ・ホルム湾 (Landsat画像)

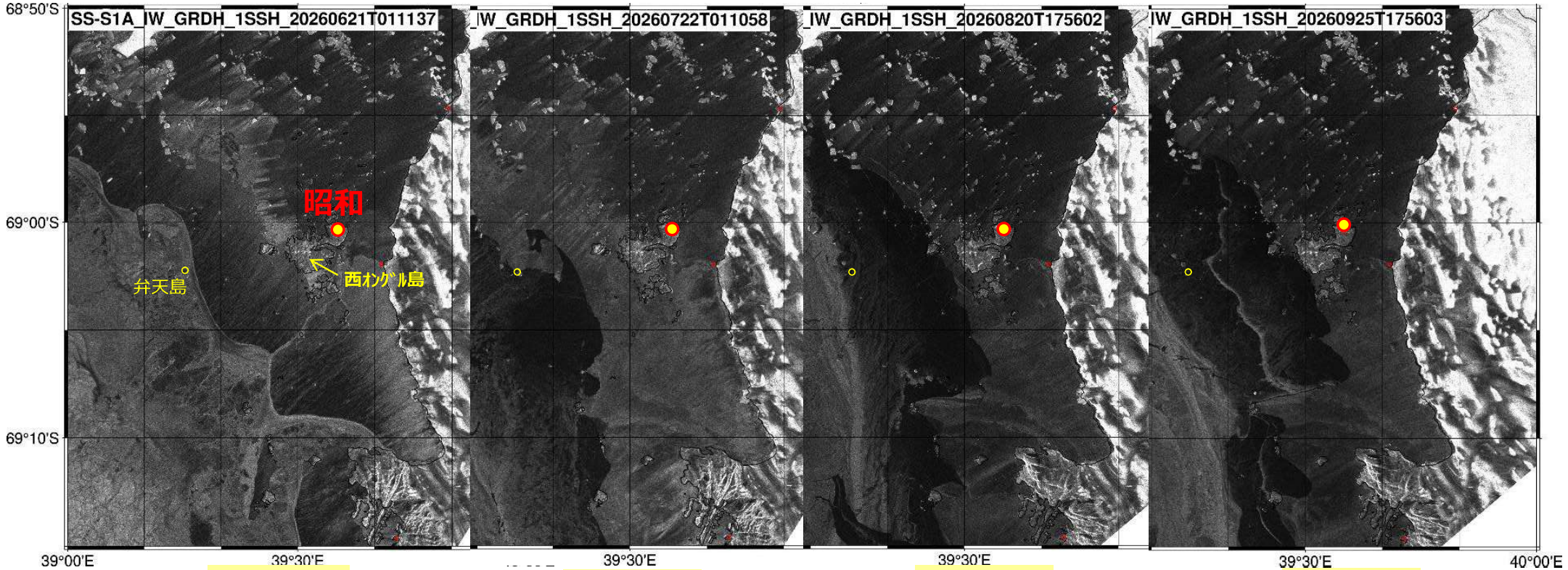
(Landsat Collection 2 image courtesy of the U.S. Geological Survey)



湾内全域は安定的に凍結していない模様。

2026年 6-9月の昭和基地周辺 (合成開口レーダー画像)

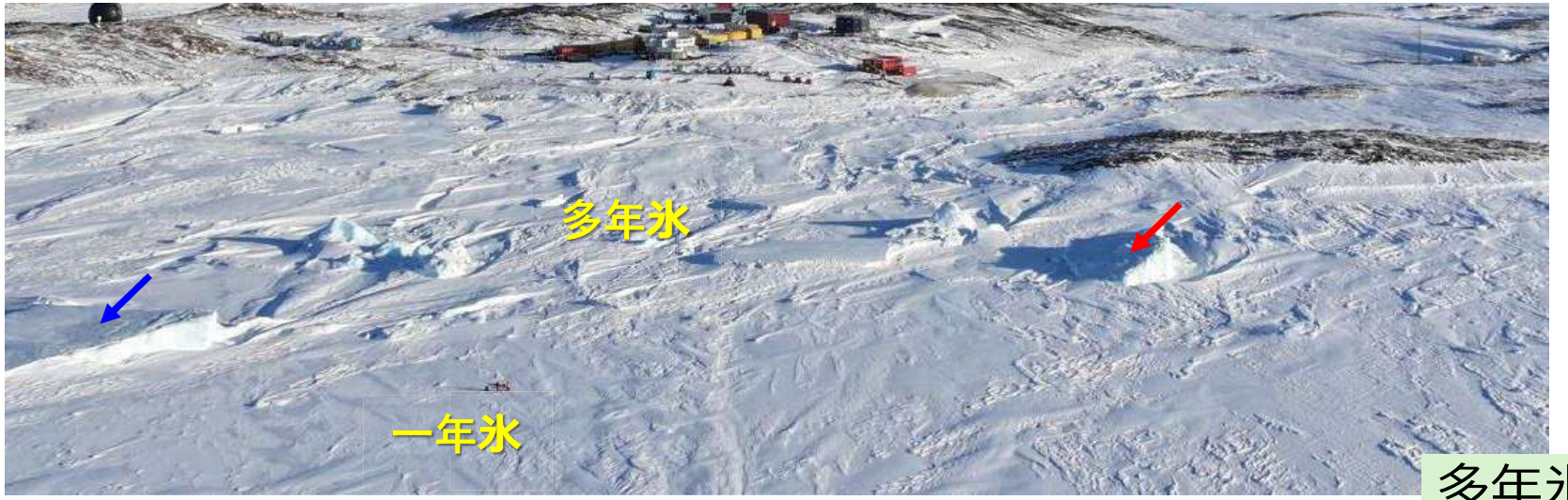
(Contains modified Copernicus Sentinel data 2026)



6月21日 **7月22日** **8月20日** **9月25日**

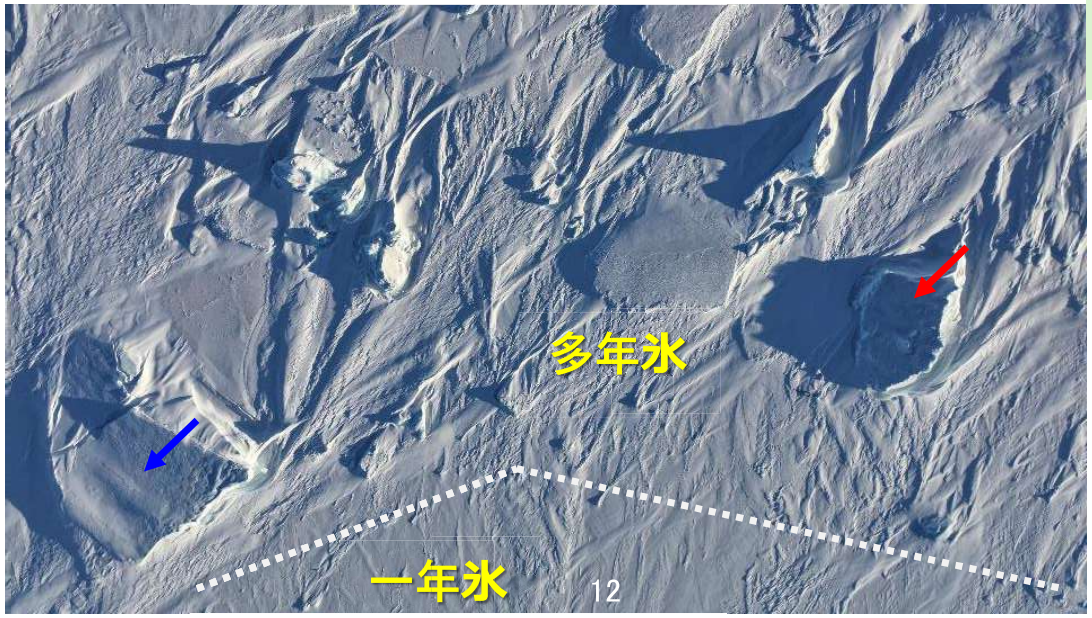
荒天のたびに、オングル諸島西方の流出域が広がり、西オングル島西岸まで達している（9/23時点）。

2026年9月4日，北の浦　（67次越冬隊が無人航空機で撮影）



北から南へ、基地主要部の方を撮影。

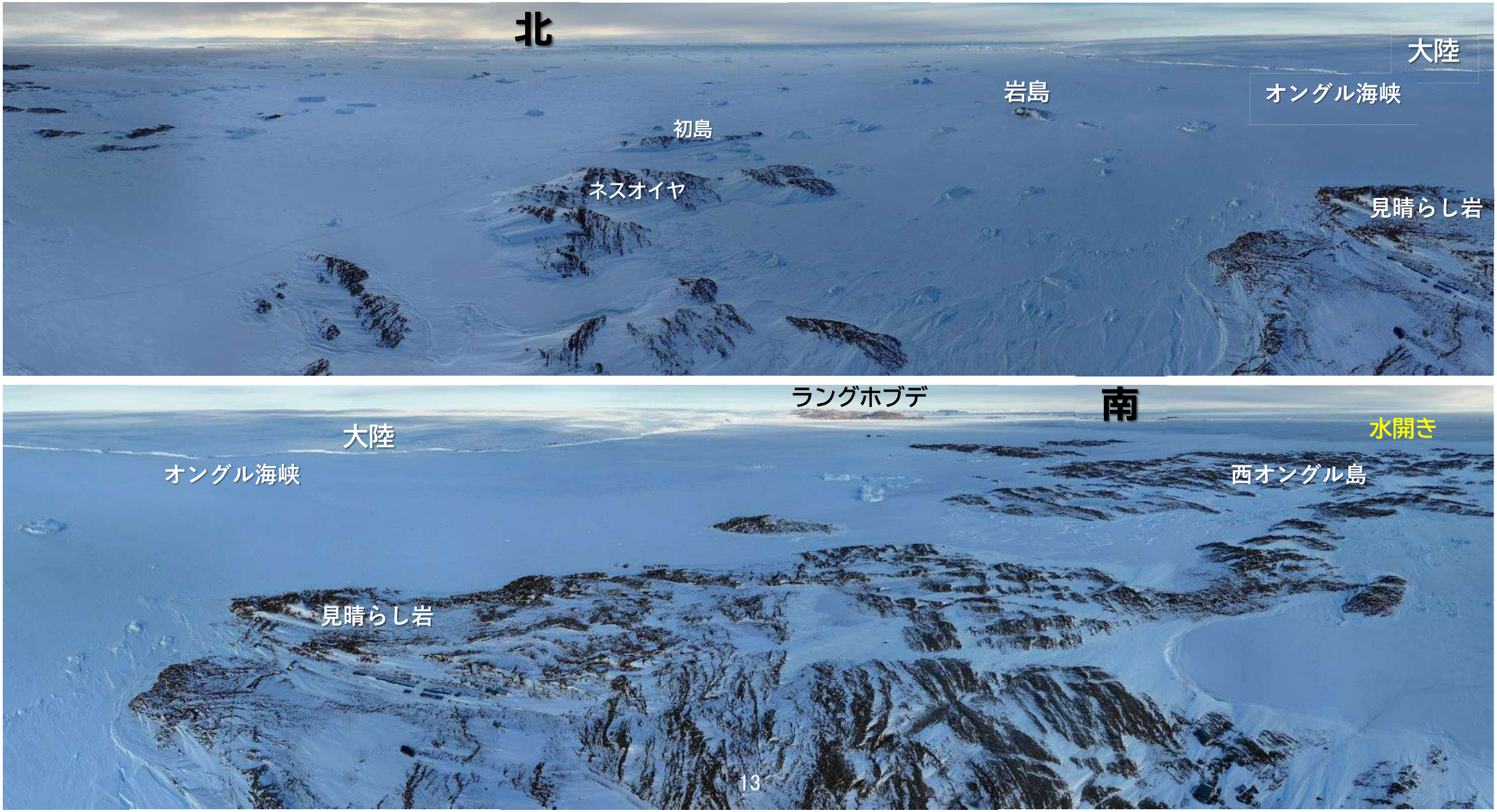
（上下の写真で、各矢印が同じ氷山を示す）



多年氷と一年氷との間で段差あり。

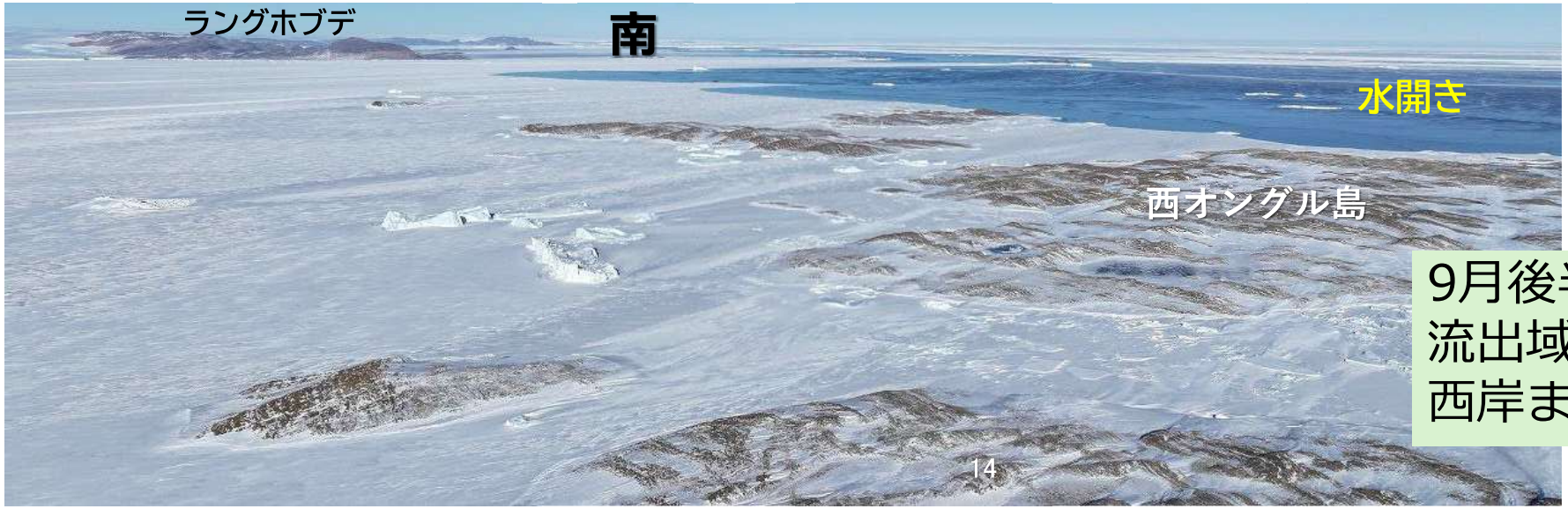
真下を撮影

2026年9月13日，オングル海峡の北/南方　（67次越冬隊が無人航空機で撮影）



2026年9月25日，基地周辺 北～西～南 （67次越冬隊が無人航空機で撮影）





9月後半に荒天が続き、
流出域が西オングル島
西岸まで広がっている。

令和８年度砕氷艦「しらせ」年次検査・航空機（CH-101）定期修理について

資料4
南極地域観測統合推進本部
第102回輸送計画委員会（R8.10.8）

防　衛　省
海上幕僚監部

○修理完工、68次行動に支障なし。

	4月	5月	6月	7月	8月	9月
全　般		7 年次検査			3	
			9 渠中工事 20			
					24 係留運転 27・28 海上運転 31・1 海上試験	
船　体	・船体、船底塗装　・１、２番クレーン陸揚検査　・主錨整備　・第２系統便所真空搬送式換装					
機　関 電　気	・１号２号主機オーバーホール　・推進電送機開放検査					
水中武器 通信電子	・音響測深儀検査　・レーダー全般検査　・無線機全般検査　・GPS用ケーブル交換 ・氷海航法支援装置検査　・ジャイロコンパス検査 ・CTD曳航用ワイヤー交換					
不具合箇所	なし					

航空機	・９１号機　定期検査（令和８年５月２５日～６月５日、８／１８～９／１７） ・９２号機　定期検査（令和８年５月７日～８月１７日） ※　２機搭載可能

資料５
南極地域観測統合推進本部
第102回輸送計画委員会（R8.10.8）

令和９年度　南極地域観測事業概算要求の概要

〔単位：千円〕

事　項	令和8年度 予算額 (A)	R9年度 概算要求額 (B)	対前年度比較 増▲減額 (B)－(A)	備　考
南極地域観測事業費（a）	5,871,951	7,507,688	1,635,737	
観測隊員経費	53,995	54,727	732	・極地観測等手当 ・観測隊員派遣旅費　等
観測部門経費	329,965	438,824	108,859	・定常観測経費 （総務省、気象庁、海上保安庁、 国土地理院、文部科学省）
海上輸送部門 経費	5,343,703	6,993,257	1,649,554	・航海/南極手当 ・航空機/船舶運航経費 ・次期輸送体制構築のための調査費　等
本部経費	144,288	20,880	▲ 123,408	・南極本部各種会議開催 ・南極条約事務局拠出金　等
国立大学法人運営費 交付金（b） ＜国立極地研究所＞ [※]	1,314,826	1,454,826	140,000	・観測経費 （モニタリング観測、研究観測） ・設営経費 （昭和基地維持管理等）　等
合　計（(a)+(b)）	7,186,777	8,962,514	1,775,737	

※　大学共同利用機関法人情報・システム研究機構の運営費交付金の一部